

## 第22回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 令和3年11月4日（木） 午後5時00分～午後7時00分

場所 京都市京セラ美術館 講演室

出席委員（敬称略）：

＜現地会場＞池坊専好会長，赤松玉女副会長，笹岡隆甫副会長，荒木美弥子委員，  
井上八千代委員，奥野史子委員，河島伸子委員，清水重敦委員，  
ジョナ・サルズ委員，杉本歌子委員，建畠哲委員，田中誠二委員，  
谷口かんな委員，寺嶋聖津子委員，松田規久子委員，やなぎみわ委員，  
吉田良比呂委員

＜オンライン＞青木淳委員，山本毅委員

事務局：山中博昭文化芸術政策監，砂川敬文化芸術都市推進室長，船橋律夫文化交流推進  
担当部長，坂根朋子美術館担当部長，山口壮八文化財担当部長，橋本悟担当部長ほか

- 1 開会
- 2 議事 京都市の文化芸術政策の現状と方向性について  
事務局から資料説明後，別紙のとおり意見交換
- 3 閉会

## 本市の文化芸術政策の現状と方向性について

### 事務局

- ・ 先ほど御説明した本日の議題の御議論をいただく中で、「①コロナ禍を経て、アフターコロナ・ウィズコロナに向けた、これからの文化芸術の在り方や変化について」、「②これからの文化芸術と行政の関係性、持続可能な在り方について」、「③文化と経済の融合について」についても知見を頂けるとありがたい。

### 委員

- ・ 文化芸術もデジタルトランスフォーメーションが重要。対面で文化芸術の本質を共有するだけでなく、オンラインによって海外も含めて時空を超えて文化芸術を体験する、企業の創造的な活動に派生するといったデジタル化が必要。
- ・ 資料にある「Arts Aid KYOTO」が国内企業向けと感じた。コロナ禍でも世界的なホテルが京都への投資を狙っている。海外企業との連携を可能とすれば有効なのではないか。

### 委員

- ・ 昨年のふるさと納税型クラウドファンディングを使った支援制度は非常に良かった。ただ、募集期間が短く、すでに一定の公演を抱えている方などしか応募できなかった。今回、目が向けられた、民間が担っているライブハウスやギャラリーといったところに今後もっと応援が届くとよいと思う。
- ・ 行政の担当と文化の現場との距離がある。京都芸術センターのキュレーターのように、行政のことも文化の現場のこともわかっているつなぎ手がほしい。
- ・ アート思考は海外でも流行っており、現代アーティストが3～6か月間、企業に滞在して見聞きしたこと、会社の理念等を物語としてアート作品化し、共有している。企業だけでなく他のさまざまな組織においても実施できれば良いと思う。アーティストが滞在し、周りとのコミュニケーションして作品を作ることは、互いの刺激にもなる。

### 委員

- ・ 京都文化芸術都市創生計画の方向性の第一項目に「暮らしの文化や芸術に対する豊かな感受性をもった人々を育む」が挙げられていることが素晴らしい。トップクラスの芸術家は大切だが、その街の芸術、文化をはかるのに最も重要な指標はアマチュア愛好家の活動の厚みと水準。そして、よきアマチュアの活動の陰には必ずそれに寄り添うプロたちがいる。目立つ人を育てるだけでなく、まじめに取り組んでいる中堅クラスのプロや芸術大学の学生たちがしっかり育つことが重要である。
- ・ コロナ禍の中、きちんと申請して補助金を獲得できる人と、申請段階で躓いている人がいる。助ける施策をきめ細かく実施してもらえるとありがたい。

#### 委員

- ・ アマチュアを含めた若い人への支援は非常に重要。京都芸術センターには相談窓口が設けられており、補助金の申請方法だけでなく、人生相談に近いことも含めてアドバイスしている。
- ・ 美術館・大学はデジタルリテラシーが遅れていたが、コロナ禍で一気に進んだ。入国できない留学生でも、データを送れば、3Dプリンタで作品を再現できる。また、アーティストのギャラリートークも、オンラインでは比較的容易に実施できる。これらはアフターコロナでも有効なノウハウであり、積極的に生かしていくことが重要。

#### 委員

- ・ コロナ禍により、鬱憤した思いを爆発させたいと思っている方が増えているのではないかと。芸術家だけでなく、一般の方が表現できる場も大事。アートは心の開放ともつながっている。
- ・ アーティストと一般の方との交流の場も欲しい。中高年から絵を描いたり、作詞作曲して歌ったり、踊ったりする人が増えている。芸術が「自分ごと」となることで、京都の「芸術文化」に意識が向き、守っていくことにつながるのではないかと。

#### 委員

- ・ 文化芸術は生活に根付いてこそという側面がある。プロの目を持ちながら一般の感覚が分かる人に分かりやすく伝えてもらうことが大切。
- ・ バーチャルやウェブで子どもたちにも大切さを伝えてあげたい。情報端末は一定普及しているため、専門家との通訳ができる人がいるとさらに広がる。そういった方が多い京都の財産を生かし、つなぐシステムをどうするかがこれからの課題である。

#### 委員

- ・ 相談窓口の存在も助成金があることも実は把握しているが、事務仕事に慣れない者にはハードルが高く、相談窓口はありがたい。無料でなくともよいので、申請を一度でもフォローしてもらえると、次から自分でできる人も増えるのではないかと。

#### 委員

- ・ ある京町家でバーチャル体験できるものを作って子どもたちに体験してもらったところ、リアルな京町家に来た際に驚くべき理解力を見せたそう。我々はリアルな情報のサポートとしてバーチャルを捉えているが、今の子どもはバーチャルの方を本質的と捉えている可能性がある。リアルとバーチャルの境目を、もう少し豊かにとらえる仕組みが必要なかもしれない。

#### 委員

- ・ コロナ禍で自分を見直す機会が増え、身近にある文化芸術の豊かさ、自分らしさを求めるようになっている。過去に文化に触れた経験があるからこそ、再び思い起こされる。
- ・ 情報がSNSで発信され、さらにそれをきっかけとしてリアルを見に来る。また、ウィズコ

ロナの時代となって高齢者も苦も無くデジタル情報にアクセスしている。リアルとバーチャルは分かれているのではなく、もはやひとつながりなのではないか。

- ・ バーチャルの活用には、技術的に難しい部分を克服し、リアルの中で人と人をつないで仲間づくりをする必要がある。また、リアルの中でもバーチャルの活用に向けたつなぎ手が重要だ。

#### 委員

- ・ 小学生の職業体験の一環として、全国の4つの学校をインターネットで結ぶ特別授業の取組を実施した。違う場所にいる同じ世代とつながり、意見を交換する体験が提供できた。バーチャルとの関係では、文化芸術でもこういったことが生まれてくるのではないか。
- ・ 社会の分断、考え方の違う人を攻撃する雰囲気の中、文化芸術は多様な価値観・視点を与えてくれる重要なもの。行政には工夫して支援を行ってほしい。「Arts Aid KYOTO」のように、社会・地域全体で支えていくことが重要だと思う。

#### 委員

- ・ 文化芸術でもデジタル化を考えざるを得ない。紙媒体では締切があるが、今は情報が来れば即座に速報で流すことが重要だ。ただ、記事によって媒体に向き不向きがあり、解説やガイド、書評はネットでもじっくり読まれている。速報には取り組みつつ、じっくり紙媒体にすることも重要である。やはり「頂きは高く、すそ野は広く」が大切だ。

#### 委員

- ・ 京都にはブランド力があり、在住経験のある海外の方の多くが京都の現状を案じている。「Arts Aid KYOTO」の英語版があれば海外企業や個人から寄付を集められるのではないか。
- ・ 以前は、大学で演劇を見に行く課題を出していたが、今はオンラインで公開されているものを紹介している。ただ、中には課題のために講義の映像を2倍速で見ている学生もいる。一概には言えないが、実際に演劇を体験し、圧迫感を感じることも重要。

#### 委員

- ・ 大きな投資をして大きな展覧会を作り、多くの動員で回収するモデルが困難になった。そのような中では今持っているものを再認識することが重要である。展覧会そのものよりも、そこに至るまでの調査に多くの労力がかかっており、これ自体がプロジェクトと言える。出来上がった演奏を聴くだけでなく、すそ野を広げるためのプロジェクトが重要だ。
- ・ オンラインでは映像、Zoom等を使うため、関わる人が非常に増えるのでお金もかかる。ただ、関わる人、その仕事を増やしていけることは良いことでもある。文化は人との関わりであり、その層を増やしていくことにつながる。単に節約するだけでなく、社会の構造を変えることにお金を使うことが大事だ。
- ・ 「Arts Aid KYOTO」では、一方通行の分配だけでなく、分配された者同士がつながる形にもなればよいと思う。

## 副会長

- ・ 弱い立場の若手芸術家であっても、ただ支援を受けるだけの側にしない仕組みがあってもいいのではと思う。小学校での美術や音楽の授業が減って子どもたちの芸術体験が貧弱になったり、福祉の現場などではアート活動など芸術家が求められている。それぞれ教員や支援員になってもらうのではなく、若いアーティストたちが少しずつ社会と関わってみんなで支え合うなど、支援はされているが自分たちも力になれる形、支え合う形にできるとよい。作品を売ってマーケットに出ることも大事だが、違う形で社会に貢献できるつなげるシステムができればありがたい。芸大の卒業生が小学校の空き教室をレジデンスで使う代わりに、児童や地域の人たちが創造の現場を体験している例もある。これも一方的にアーティストがアトリエの提供を受けるだけの話ではない。このようなつながりのシステムができればと思う。

## 委員

- ・ 今、私が行っているのは、オペラを海外と結んで作る協働プロジェクト。日本で映像コンテンツやプランを作り、海外のスタッフや演者が公演する。民間で行うのは非常に大変だが、行政が主催する大きなプロジェクトだから出来る側面がある。もし京都市が海外の映像作家とこのような取組を行うなら実現できると思う。
- ・ 歴史上からも社会がしんどいときにこそ名作が生まれると思う。若い人が、コロナ禍で集えない・肌身で感じられないのは大きな懸念点だが、作家というものはしぶといので大丈夫。今は正念場だが、今後良い作品が生まれてくる。

## 委員

- ・ コロナ禍によってオンラインに追い立てられてきた。対面ではお互いに緊張感があるが、ネットでは最後まで見ていただけないことが多い。多くの物がいくらでも見られるからこそ、現実の舞台につながってこない悲しさがある。
- ・ 実際に人が集い、顔を見ることが喜びであることを改めて実感した。バーチャルに対してどう取り組んでいけばよいのかをしっかりと考えなければならない。

## 副会長

- ・ ピンチをどうチャンスに変えていくかという話だと思う。高齢の方も苦も無く情報にアクセスしているとお話があったように、改めてしっかり取り組んでいかなければならない。
- ・ 今、祇園町で映画の撮影をしているが、これはコロナ禍だからこそできること。京都を世界に売り出す面白い仕掛けの一つだと思う。
- ・ リアルとバーチャルの境目に関しては、自分自身も子どもたちもデジタルデトックスが必要などころもある。その部分の教育も重要である。
- ・ 「Arts Aid KYOTO」は良い取組。英語版はぜひ作ってほしい。
- ・ 豊かな感受性を持つ人々の育成は加速させるべき。オンラインも活用できるが、コンサートや美術館はまだリアルが強い。やはりリアルも重要である。
- ・ 文化も観光も疲弊している。これらを掛け合わせていくことが重要だと思う。

- アート思考に関しては、我々は最短距離でなく試行錯誤してゴールを見つけることを当然のように取り組んでいる。これをうまく発信することが重要で、発信を手助けするつなぎ手、それを生み出し、うまくマッチングする施策を実施していただけると良いのではないかと。

会長

- コロナ禍で価値観の転換を余儀なくされ、これまでのモデルを再認識せざるを得なかった。例えば社会的強者と弱者のように、これまでは対立的にとらえられてきたものが、ときには融合したり、混在したり、つながったりすることで新しい世界観が提示されている。暗闇の中に光がさしている側面もあるかと思う。